

コンプレックスの行き先は

H a z u k i & K a z u k i

里崎 雅

Miyabi Satozaki

termity



エタニティ文庫

目次

コンプレックスの行き先は	5
番外編 独占欲の行き先は	295
書き下ろし番外編 「二人の未来」の行き先は	337

コンプレックスの行き先は

1 波乱の再会

「葉月ちゃん、どう？ これから」

終業後、私服に着替えてロッカールームから出てきたところを年配の上司に呼び止められた。手の形はくいつとジョッキを飲む形になっている。飲みに行こうとのお誘いだ。

「ハイハイ！ 行きますす！」

顎の下で切り揃えた茶色いボブの髪を揺らしながら、小山内葉月は二つ返事でびよんつと飛び上がる。

「嬉しい〜！ お腹ぺこぺこで、一人でどこか食べに行こうと思ってたんで」

「そーかそーか。じゃ、他の皆も誘って行こうかあ」

少しだけ大袈裟に喜んで見せると、上司はにこにこ嬉しそうに葉月の肩をぼんぼんと叩いた。世の中の大半のOLは、「セクハラ」と感じて目を吊り上げるところなのかもしれないけど……自分に限ってセクハラは絶対にならないと思えるから、嫌な気持ちにも当然ならない。

しばらく玄関で待っていると、上司に誘われた男たちがぞろぞろと集まってくる。ほとんどが葉月よりも十歳以上、年上だ。だが葉月は気にすることなく、上司の後をルンルンとついていく。

「角の焼き鳥屋でいいかな？」

「はい！ もちろん！」

（嬉しい！ あそのシロは絶品なんだよね〜）

途端にお腹がぐうつと鳴り、慌てて服の上からぎゅつと下腹部を押さえた。

二十四歳の葉月が勤めているのは杉並建設という会社の小さな支店で、女性社員がかなり少ない。去年、仕事を教えてくれた先輩OLが寿退職してしまうと女性の正社員は葉月のみとなり、他は母親ほどの年齢の短時間パートが数人いるくらいだ。

同じように、若い男性社員もこの支店にはあまりいない。入社した当初は多少がっかりもしたけれど……父親のコネを使ってようやく就職できた会社なのだから、文句など言えない。

それに、少しぼつちやりとしたこの体形では、たとえ若くてかっこいい人がいたって状況は何も変わらないだろう。

若くて紅一点というだけで、オジサマたちは葉月のことをとても可愛がってくれる。彼らに囲まれた職場は、意外なほどに居心地がよかった。

寂れた雰囲気だが味は抜群にいい焼き鳥屋で、葉月はニコニコとオジサマたちに混じって座布団に座る。

「葉月ちゃん、なんでも好きなものの頼みなよ」

「ハイ！ ありがとうございます！」

父親や親戚のおじさんと言つてもいくらいの年齢の彼らは、ガリガリのモデル体形の美人よりふっくらして愛想のいい子の方がずつといいと言つては葉月を甘やかす。

それにまんまと乗つてしまう自分も、いけないかもしれないけど。

「さあ、葉月ちゃん、来たよ〜！」

お通しの長芋と梅肉の和え物が、葉月の前にコトリと置かれた。

「えへ、じゃあいただきます！」

早速箸を取り、口をつける。

「ん、美味し」

「俺、梅干し嫌いだから、葉月ちゃん食べていいよ」

「お、焼き鳥来たぞー」

運ばれてきた料理が、次々と葉月の前に置かれていく。

「うー、美味しい〜！」

空っぽのお腹にしみわたるような美味しさだ。焼き鳥を手に満面の笑みを浮かべる葉

月を、オジサマたちは満足そうに見つめている。

「葉月ちゃんは本当、旨そうに食べるよなあ」

「そんだけ美味しそうな顔で食べてくれたら、こつちも奢りがあるよ」

まるで食べきかりの娘を見つめるかのような温かい視線に、何故だか彼らの期待に応えなければいけないような気持ちになり——結局次から次へと料理に手を伸ばしてしまふ。

（ああ……だから私、痩せられないんだよなあ）

「こんなにたくさん食べたら、また太っちゃう……」

ぽつりと呟くと、葉月を誘った上司が驚いたようにこちらを見た。

「葉月ちゃん、痩せたいの？」

「そりゃ、痩せたいですよ！ 一応これでも、お年頃の女の子なんですから！」

「そんな必要ないよ〜」

にこにここと微笑むのは、向かい側に座っている山下だ。彼は三十代前半で、一応この支店の中では若手に分類されるが、すでに結婚しており二児の父親でもある。

「男はね、少しくらいぽつちやりしてる子の方が好きなんだから」

そう言う山下の奥さんが、スレンダーで背の高い美人だと葉月は知っている。

「皆さんはそう言ってくれますけどねー、世の中の若い男性は、大抵細くって美人な人

を選ぶじゃないですか」

葉月が言うのと、バツが悪そうに皆が顔を見合わせる。

「そんなことないよ。なあ?」

「そうとも。いつか葉月ちゃんにもいい男が現れるさ」

「本当ですかあ?」

いつも会社と家を往復するだけの毎日で、たまにこうやって飲みに誘われても、一緒にいるのはオジサマたちだ。行くお店もおしゃれとは言いがたく、味は間違いないが若者なら入るのをためらうような店ばかり。

これでは、出会いなんてあるわけもない。

「ま、いいですけどね。次は黒ごまのアイスを食べようかな」

「うんうん、そんなこと気にしないでどんどん食べなよ」

ここまで来ると、本当に親戚のおじさんのようだ。苦笑いしつつも、遠慮せずにメニューに手を伸ばす。

食べていると、ちょっとした嫌なことは忘れられる。

葉月は、お腹いっぱい幸せな気分が何より好きだった。弱い人間なのかもしれないけれど、この幸福感から逃げることができない。

(でも、いいの。これが私の幸せなんだもん)

葉月は、運ばれてきたばかりの焼きおにぎりをぱくりと頬張った。

「葉月ちゃん、ゴメン。お茶淹いれてもらってもいい? 取引先の営業の人が来てるんだ」

翌日、パソコンに向かって一心不乱いっしんらんにデータ入力していると、背後から山下に声をかけられた。

「丸山まるやまさんに頼もうと思ったんだけど……備品の買い出しに行ってるみたいでさ」

お客様へのお茶だしは、年配の女性パートである丸山がしてくれることが多い。

正社員の葉月にやらせるのは悪いとも思っているのか、葉月が立ち上がったも制されるのがほとんどだ。

最近はそれにすっかり甘えていたため、来客があったことに全く気付いていなかった。慌てて壁にかかったホワイトボードを確認すると、「十五時・滝波たきなみメイドカル様」と確かに来客の予定が書き込まれている。

「ご、ごめんなさい! 気付かなくて」

「いいいいいよ」

ニコニコと笑いながら山下が応接室に消えていく。反省しつつ急いで給湯室に向かい、手早くお茶の準備をして応接室へ向かった。

「失礼します」

ノックをしてから応接室に足を踏み入れると、山下の向かい側に座る眼鏡をかけた男の人の顔がちらりと見えた。葉月は口元に笑みを浮かべ、俯き加減に会釈をする。相手の顔はよく見えなかったけれど、スーツの雰囲気からして若そうな感じだ。

コトリとお客様の前に湯呑茶碗を置いた瞬間、頭上から声が聞こえてきた。

「もしかして……小山内？」

「え？」

突然呼ばれた自分の名前に驚いて顔を上げると、目の前の男性が眼鏡の奥の目を見開いて葉月を見つめていた。

さらりとした短めの黒髪に、細いグレーのフレームの眼鏡。デキるサラリーマン風で、クールな雰囲気がかっこいい。

こんなかっこいい人、自分の知り合いにいただろうか？

人違いじゃないかと首を傾けると、その男は口の端をくくつと上げてから眼鏡を外した。

現れた顔を見て、葉月の表情が凍りつく。

「き、木田……」

「久しぶり。全然変わってないのな、お前」

木田は一瞬浮かべたニヒルな表情を隠し、営業マンらしく爽やかな笑顔を向けてきた

けれど、葉月の顔は引きつったままだ。ゆっくりと眼鏡をかけ直す仕草を、呆然と見つめる。

「あれ？うちの小山内とお知り合いでしたか？」

相変わらずニコニコ微笑んでいる山下が、そう言った。

「ハイ。小中学校が一緒だったんですよ」

「へえ、それは偶然ですね！」

山下と木田が穏やかに交わす会話が、耳に入っていない。

「どうしたの？葉月ちゃん？」

不思議そうに山下に顔を覗き込まれ、葉月は慌てて意識を目の前の二人に集中させた。

「ひ、久しぶりだね。木田……くん。眼鏡かけてるから、全然わからなかった……。すつかり大人の社会人になっちゃって」

今、自分は自然に話せている？笑顔は引きつっていない？

心が、どんどん乱れていく。

「お前は変わってないのな」

「葉月ちゃん、昔からこんな感じなんですか？」

「あー、そうですね。昔つから明るくてムードメーカーで、雰囲気も見た目も変わってない」

はははっと木田が高らかに笑った。
 いつもなら、そんな風に言われても「悪かったですね！ ずっと太いままで！」なんて笑い飛ばして、全然気にもとめないのに。

じとっと生ぬるい汗が一筋、葉月の背中を流れた。

「葉月ちゃん、うちの支店では唯一の若い女の子で。皆のオアシスなんですよ」

「へえー、オアシスですか」

木田の目が、意地悪そうに細められた。

「——きつと、バカにしてるんだ。私のこと。昔からちつとも変わってないって……」

悔しさが込み上げ下を向きそうになった時、コンコンと応接室のドアをノックする音が聞こえた。

「山下さん。来客中に申し訳ないんですが、ちょっと緊急の電話が……」

「え？」

山下が慌てて腰を半分浮かした。

その様子を見た木田が、気さくに言う。

「あ、どうぞ。久しぶりに小山内と話をして待ってますから」

「そうですか？ 申し訳ありません。それじゃあ葉月ちゃん、ちょっとだけよろしくね」
 固まったままの葉月に気付くわけもなく、ぼんつと肩を叩いて山下が応接室から出て

いった。途端に室内が沈黙に包まれる。

「久しぶりだな」

「……」

会社の人がいなくて、ここまでの、にこやかに話す必要はない。木田の言葉には答えずむつつりと黙り込み、葉月は視線を床に落とした。

「なんだよ、久々に会った同級生に対して、その態度はないんじゃないか？」

「あの、仕事がありますので、失礼します」

ぺこりと頭を下げて立ち去ろうとしたら、ソファに座ったままの木田がぐつと葉月の手首を掴んだ。

思いがけない行動に驚き、見ないようにしていた彼の顔をまっすぐに見つめてしまう。

「お前……もしかしてまだ怒ってるの？」

「なんのこと？ 心当たりないんだけど」

「じゃあその態度はなんだよ」

「キライだから。木田のこと」

吐き捨てるように言った葉月に、木田がひくりと片方の眉を動かした。

「ほー。仮にも俺は今、取引先の人間でー、仕事の話をつめてる最中なんですけど。社会人のくせに、よくそんな態度が取れるな」

木田の言葉に、ぐっとつまった。

（どうして今日に限って、丸山さんは備品を買いに行っちゃったんだろう……）
そんな見当はずれな恨みさえ湧いてくる。

「放してよ」

ぶんと肉が揺れるほどに腕を振った。その勢いに負けて木田の手が離れたと同時に、カチャリと応接室のドアノブが回る音が聞こえた。山下が戻ってきたのだろう。

「失礼します！」

「うわっ、葉月ちゃん？」

入ってこようとした山下を突き飛ばすようにして、廊下に飛び出した。商談がどうなるかと、知ったことではない。とにかく、木田の視線が届かなくなるところへと行きたかった。

給湯室に向かいながら、込み上げる涙をぐっと堪える。

だめだ。いつも明るく元気な「小山内葉月」で通ってるんだから……突然涙を浮かべるなんて、キャラじゃない。お盆を棚に戻し、深呼吸を繰り返す。

「おっ！ 葉月ちゃん。取引先でもらったお菓子、食べる？」

給湯室の横を通りかかった社員が、立ち尽くす葉月に気付いて声をかけてきた。彼が差し出した手の上には、地方の銘菓が載っている。

「あ、ありがとうございます！ 嬉しいです」

慌てて、にっこりと笑みを浮かべてそれを受け取った。

本当はちっとも嬉しくなんてなかったけれど、受け取らなかつたら皆が心配する。満足気に頷いた彼が立ち去った後、大きく深呼吸をしてから、もらったお菓子をポケットに入れ席に戻った。

しばらくして、応接室から戻ってきた山下が心配そうに葉月のデスクへとやってきた。

「さっきはどうしたの？ 葉月ちゃん。慌てて飛び出していったけど……」

「え、あ」

うまい言い訳が咄嗟に浮かばず視線を泳がせていると、たたみかけるように山下が口を開いた。

「木田くんもなんか気にしてたみたいだったし……。葉月ちゃん、急に出ていくんだもん」

木田は、何も言ってないらしい。ほっと胸を撫で下ろすと同時に、するすると言葉が口をついて出た。

「実は……お昼を食べすぎちゃったみたいで、急にお腹が痛くなつて……恥ずかしくて、焦って出てきちゃったんです」

「あ、そっかあ。そういうことだったんだ。ごめんごめん」

山下が困ったように眉を下げ、顔の前でひらひらと手を振る。

(太ってる私には……どーせびつたりの理由だよ)

そんなことを考える自分にも嫌気がさし、また涙が滲みそ^じうになる。

「食べすぎちゃダメだよ」

「えへへ」

安心したようにデスクを去る山下の後ろ姿を、葉月はむなしい気持ちで見送った。

「お先に失礼します」

飲み会の誘いがないことに今日ばかりはほっとしながら、足早に会社を出た。木田の突然の登場で受けたショックは、未だに尾を引いている。葉月はもやもやとした気持ちを抱えながら、駅へと歩いた。

彼のが嫌いなのではない。ただ、彼を思い出すと、忘れてしまいたい過去をどうしても思い出してしまふ。

下を向きながらとぼとぼと歩いていると、ふいにプツと車のクラクションの音が聞こえてきた。

(なんだろう?)

ぼんやりと音のした方に目を向けると、見慣れないシルバーのRV車が停まっていた。

周りを見渡しても自分しかないが、心当たりはない。きつと人違いだろうと思つてスタスタ通りすぎようとすると、助手席の窓がするすると開いた。

「おい！ 小山内！」

聞き覚えのある声に、ドキリとする。恐る恐る視線を向け、声の主を確認した葉月の身体は一瞬で凍りついた。

「木田……」

「今終わりか？ 乗れよ」

「……」

無視無視。葉月は聞こえなかったフリをして、さっきまでとはうって変わり速いスピードで歩き出した。

「オイ！」

プーツと長いクラクションが鳴らされたが、立ち止まる気はさらさらない。どんだん先に行く葉月に葉を煮やしたのか、バンツと車のドアを閉める音が聞こえ、背後から力強く肩を掴まれた。

「待ってって」

「……放してよ」

自分でも驚くほど低い声が出た。ここは会社の近くだし、なるべく目立ちたくない。

「まあいいからさ。付き合えよ、メシ」

何をもって、「まあいいからさ」という言葉が出るのだ？ カチンときて、肩にかけられた手を勢いよく払った。

「行かない。なんで私が木田とご飯食べなくちゃいけないの」

「いいだろ。同級生との久々の再会なんだから。旨いとこ連れてってやるよ」

「食べ物でつらないですよ！」

「仕事終わって、腹も減ってるだろ？」

「私だって食べたくない時はある！ アンタとなんて、何も食べたくない！」

言うだけ言ってさっさと歩き出すと、さすがに木田も諦めたのか車のドアを開める音が聞こえた。その音に、ほっとする。何の気まぐれで葉月を食事に誘おうなどと思っただか知らないが、そんな血迷った行動に巻き込むのはやめてほしい。

すっかり安心して歩調を少し緩めた瞬間、再び葉月の横に車が並び、耳をつんざくようなクラクションが鳴り響いた。

「わっ！」

周囲の人が、何事かと葉月に視線を投げかける。それに耐えかねて慌てて走り出しても、木田の車は葉月の隣にびたりとついたまま、クラクションを高らかに鳴らし続ける。

「わ、わかったから!!」

思わず駆け寄り助手席の窓をバンバンと叩くと、ようやくクラクションが止まった。

「じゃ、どうぞ？」

ニヤリと笑って車の中から助手席のドアを開ける木田。そんな彼の顔を睨みつけ、葉月はしぶしぶと車内に身をすべり込ませた。

どこかのファストフードかファミレスにでも連れていかれるのだろう。そう思っていた葉月の予想は見事にはずれ、木田の車は高級そうなホテルの前にびたりと止まった。

ドアマンがにこやかに車のドアを開けてくれる。車から降り建物を見上げると、そこには誰もが知っているような老舗高級ホテルの名前があった。

「あ、あの、木田？」

「なんだよ。びびってんのか？ その年でホテルに食事へ来たことがないわけじゃないだろ」

そりゃあ葉月も社会人になって二年目。付き合いや接待でホテルのレストランや料亭を利用したことくらいはある。けれど……プライベートでは完全に初めてだった。

だからって、そんな言い方はない。

むっとして立ち止まった葉月の手を、木田がすつと取った。

「行くぞ」

「あ、ちょっと」
放して――

そう言いたかったのに、彼の手は意外にも優しくあたたかくて、すっかりタイミン
グを逃してしまった。

エレベーターに乗り込み、木田の斜め後ろに立つ。どうしてこんなことになっている
のだろう。そっと前に目を向けると、思いのほか彼の背が高いことに気付いた。中学の
時バレー部に所属していた彼は、確かに長身だった記憶があるけれど……こんなに見上
げるほどだったろうか。

「ねえ、木田ってこんなに背が高かったっけ？」

「……ああ？」

木田は何故だか不愉快そうに、こちらを振り向いた。

「身長は中三の時からほとんど変わってねえよ。……お前、俺に興味がないから知らな
かったんだろ」

「な、何その言い方。当たり前でしょ！」

思わず唇をいーっと横に開く。

（なんなんだ、この男……）

ふと視線を落とし、まだ手を繋いでいることに気付く。葉月が振りほどこうとした瞬

間、木田の手に力が入った。

「残念。鈍いな、お前」

「う、うるさいな！ 大体なんで手なんか握ってるのよ！」

「握りたいから」

「はあ？」

しれっと口にされた言葉に、不本意ながら顔が火照った。

「ア、ア、ア、アンタね……」

「着いたぞ。こんなところでギャーギャー騒いでたら目立つ」

チーンと軽やかな音を立ててエレベーターが止まった。音もなく静かに開いた扉の向
こうにはレストランがあり、その前には黒服の店員が立っている。あきらかに、葉月が
普段オジサマたちと利用する居酒屋とは、格が違う。

（一応スーツだし、場違いってことはないよね……）

手を繋いでいない方の手で慌ててコートの裾を直していると、くくつと木田が笑った
のがわかった。

「……何よ」

「いや別に」

すました顔の木田は、スタスタとレストランに向かって歩いていく。自然と彼の手に

引っぱられる形になり、よろめきつつその後ろに続いた。

「予約していた木田です」

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

予約？ ウエイターに誘導される木田の後に続きながら、その言葉の意味を考える。案内された席は夜景のよく見える窓際で、二人掛けのテーブルには「予約席」の札が置かれていた。店の中でも一番と言っているくらい見晴らしのいい席を、「予約」。その意味を考え、ハッと気付く。

（誰かのために予約してて……フラレちゃった、とか？）

偶然再会した葉月以外、誘う相手がいなかったら笑えるが、フラレたとすると話は別だ。可哀想な木田に、付き合っただけでもいいだろう。

「私、今日そんなにお金持っていないよ」

「無理矢理連れてきたのは俺だ。払えなんて言わない」

眼鏡の奥の目が、微かに細められた。その眼鏡のせいなのだろうか。中学の時はこちらかと言うとガサツな運動系だった彼が、すっかり知的に見える。

目のやり場に困って窓に目を向けると、このシチュエーションにはもったいないくらいに素晴らしい夜景が広がっていた。

ほどなくして、ウエイターが二人の前にシャンパンのグラスを置いた。木田が目の高

さへとグラスを掲げたのにつられそうになったが、それをすんでのところで堪え口へ運ぶ。

彼と、乾杯する理由はない。

「木田、お酒飲んじゃったら車はどうするの？」

「代行でも呼ぶさ」

「……それならいいけど」

元々木田に送ってもらったつもりはなかった。タクシー代くらいの手持ちはあるし、遠慮なくシャンパンを飲む。

シユワシユワと泡立つ黄金色の液体を全て喉の奥に流し込んだ彼は、次に白ワインを注文している。木田との付き合いは中学を卒業すると同時に消滅していたから、こんな風にお酒を飲むのももちろん初めてだ。

お互いがアルコールを口にかけていることに違和感を覚えながら、ちらりと目の前の男を見つめる。そんなにお酒が強いわけではないのか、頬が微かに赤い。それでも、やっぱり中学生だった彼はすっかり大人の男に変貌していた。

「なんだよ、人のことジロジロ見て。俺のことが気になる？」

「何言ってるの？ 別に」

ふんつと鼻を鳴らし運ばれてきた料理を口にすると、あまりの美味しさに目を見張つ

た。さすが老舗高級ホテルのレストランだけあって、味も格別。

「ん〜!! 美味しい……」

気分は最悪だが、それとこれとは別だ。もぐもぐと頬を押さえ微笑んでいると、今度は木田がじーっとこちらを見つめているのに気付いた。

「な……何よ。どうせ、そうやってたくさん食べるから相変わらず太いんだって言い込んでしょ?」

「いや……お前、本当に旨そうに食べるから。可愛いな、と思つて」

「は!?!」

呆気に取られて、木田を見つめる。

「木田……なんか辛いことでもあったの?」

「別に」

「じゃあ、疲れてるとか」

「健康状態は良好だ」

「……気持ち悪い」

ニヤニヤと口元に笑みを浮かべる木田から目を逸らした。深く考えないことにしよう。どんなたくらみがあつて葉月を誘い、思わせぶりなセリフを言ってくるのかはわからないが、ヤツのペースにのつて痛い目にあうのだけはごめんだ。

そう、あの時のように――

葉月は目の前に並んだ料理に集中しようと、ナイフとフォークを握り直した。

「ごちそうさま。とっても美味しかった」

最後に出てきた白桃のムースはとりわけ絶品だった。幸せを噛みしめながら、食後のコーヒーを楽しむ。やっぱり、食べるって幸せ。他の幸せは諦めても、この幸せだけは自分ひとりでも簡単に手に入れられるだけに、やめられそうにない。

「そう。それは良かった」

デザートをキャンセルした木田は、葉月より一足早くコーヒーを飲み終えていた。

「じゃあ、行くか」

「うん」

ほんの少しのためらいはあったが、バッグの中のお財布に伸ばした手を引っこ抜いた。「私も払う」と出かかった言葉を呑み込み、木田がカードで手早く会計を済ませるのを、少し離れた場所から見つめる。

彼の後ろ姿に、胸が疼いてなんかかない。

昔のわだかまりを、忘れちゃいけない――

「あの!」

「ん？」

でも、お礼くらいはちゃんと言わなきゃ。奢おごられて当たり前の子もいるだろうが、そんな風に彼に思われたくない。きちんとお礼をすることは、社会人としても人としても当然の礼儀だ。

それなのに、会社のオジサマたち相手だと素直に出てくる「ありがとう」が、何故か喉のどの奥でつかえる。

「あの、今日、あり……」

「お、エレベーター来た。行くぞ」

タイミングよく到着したエレベーターに乗り込む木田の後を、慌てて追う。

「ちよ、ちよっと待つてよ」

乗り込んだエレベーターでほっと息をつくとき、木田は一階ではなく、どこか別の階のボタンを押していた。てっきり帰るのだと思っていた葉月が不思議そうな顔を見ると、木田が壁にもたれかかり言った。

「このホテルに、今うちのクライアントが滞在してるんだ。受け取らなきゃいけないものがあるから、付き合って」

「そうなんだ。わかった」

お礼を言うタイミングを逃し、微すかな罪悪感が湧く。

(帰りまでにきちんと言わなきゃ)

俯うつむきながらそんな考えに囚こわれていた葉月は、木田が緊張した面持おもちで下唇を噛みしめていたことに、気付かなかった。

エレベーターを降りたところで待ってしようと立ち止まると、木田が怪訝けげんな顔で振り向いた。

「どうしたんだ？」

「だってクライアントでしょう？ 私ここで待つてるよ」

「……こんなところで待つてたら、怪しまれるぞ。ここ、一応スイートがある階だし」

「え」
キョロキョロとあたりを見回してみたが、人影はない。ホテルの廊下で待つてること
は、そんなに不自然だろうか。

「ほら、いいから行くぞ」

木田は再び強引に葉月の手を取り、ずんずんと奥に向かって歩いていく。

「ちよっと、だから手……」

「お、ここだ」

部屋番号を確認していた木田が、とある一室の前で急に立ち止まった。

(私はどんな顔をしてりゃいいのよ)

せめて相手の視界に入らないようにと斜め後ろに立ち、広い背中を見上げる。木田の手がスーツの内ポケットに差し込まれ、そこから金色に輝くカードを取り出した。

(あれって……カードキー？ クライアントの部屋なのに、なんでカードキーを木田が持って……)

そう思った次の瞬間、木田の手に力がこもり、葉月はぐいっと室内へと引っぱり込まれていた。

「わっ!!」

体勢を整える間もなく、ドアがバタンと閉じられる。わけがわからず、葉月はもつれ込むように部屋の中のふかふかの絨毯じゅうたんの上に転がってしまった。

「ちよっと！ なんなの!?!」

転がり込んだ部屋を慌てて見回すと、かなり広いリビングの奥に、大きなベッドがある。シングルとかツインとか、そういった一般的な部屋ではなさそうだ。もしかしたらセミスイートというやつなのかもしれない。

「まあまあ」

うつすら笑いながら、木田が一度離れた手を差し伸べた。思い切り睨にらみつけてその手をパンツと叩くと、木田がふっと小さく息を吐き微笑みの種類を変える。

——なんで、そんな顔してるの？

状況に混乱しつつも、葉月は木田の表情に釘づけになった。

まるで、ずっと待っていた人に会ったような切ない笑み。ぼうっとその顔を見つめてから、慌てて目を逸らす。

中学の時に、散々な目に遭あっているのを忘れちゃいけない。葉月が決意を固めていると、彼は葉月と目線を合わせるように身を屈かがめた。

「自分に自信のない女って、いいな」

「……は？」

きょとんと木田を見返す。いきなり何を言うのかと、頭の中に「？」マークが並ぶ。しかし数秒後、それは自分を指しているのだと気付いた。

「それ、どういう意味？」

「そのまんまだよ。お前さ、中学の時もそうだったけど……自分の良さに気付いてない。高校は女子高だし、大学は家政科だったんだって？」

「だっ、だから何よ」

「いや、きつと出会いもなかったんだらうな」と思っ

て。バカにされているのかと思っただが、葉月の顔を覗のぞき込む木田の顔はなんだか嬉しそ

それでも、小馬鹿にされているような言い方は、全く面白くない。

「あの時みたいにからかうつもりなら、やめてよね。私、帰る」

付き合うのもばかばかしい。勢いよく立ち上がろうとした時、足首に違和感を覚えて思わず前よろめいた。

「いたっ」

素早く木田の身体が動き、ぐらついた葉月の身体を抱きとめた。がちりとした身体に、どきっとする。

「オイ、足くじいたんじゃないか？ 大丈夫か？」

「大丈夫かってねえ！ アンタが急に部屋の中へ引っぱり込んだからでしょう！」

「……悪い。そんなつもりはなかったんだけど、つい。じゃあ責任を取らなきゃな」

「ぎゃっ！」

そう言うなり膝の裏に手を差し込まれ、ぐいっと抱き上げられた。これはいわゆる……お姫様抱っこというやつだ。

「ちよ、やめてよ！ 下ろして!!」

「なんで？」

「重い！ 重いでしょ！ 後から絶対『すげえ重かった』って言うんでしょ！」

「……言わねえよ、そんなこと」

思いがけない木田のセクシーな声色こわいに葉月の身体が強張こわつたのと、奥の大きなベッドにそっと優しく下ろされたのはほぼ同時だった。

「ここか？」

黒いシンプルなパンプスを脱がされ、木田の手が葉月の足首に触れる。

「や、いたっ……」

「捻ひねったのかな。大丈夫か？」

「大丈夫かって大丈夫なわけ……」

怒りにまかせて木田の顔を真正面から見つめた瞬間、その眼差まなざしに言葉が詰まる。

「な……何よ」

「何よって、何がだよ？」

「何がって、だって」

言いかけて、言葉を失い下を向く。

（心底私を心配してるみたいな顔して……どういふつもりよ）

葉月の足首に触れていた木田の手が、わずかに動いた。ぐっと息を吞んで葉月が顔をしかめる。

「ここだな。氷もらって冷やすか？」

「い、いい！ 別に大丈夫だから！」

「冷やすなら、ストッキング脱いだ方がいいよな?」

「なっ……冷やすだけなら脱ぐ必要なんてないでしょう!」

コイツは何を言っているのだ。

呆れて木田の顔を凝視するが、彼の表情は意外にも真剣そのものである。言ってる内容はさておき、どうやら本気のようなのだ。やがて、葉月の足首に触れていた木田の指が、すうっと上がり、ふくらはぎを撫でてきた。妖しい感触に、びくんと背中が震える。

木田は片手でゆっくり眼鏡を外すと、それをシーツの上に軽く放り投げた。眼鏡のない彼の顔に、中学時代の面影おもかげが重なる。

何故だか嫌な予感が出て、葉月は木田の手から逃れるようにベッドから身体を起こし、後ずさりをした。しかし木田は、下がった分だけ葉月との距離を詰めてくる。

「木田……どうしちやったの? お酒飲みすぎた? 何か辛いこともあった?」

「こんな状況でも、お前は俺のこと心配するのか」

「だ、だって……おかしいよ、木田」

久々に再会したばかりの彼が、どうしてこんな行動を起こすのかわからなかった。中学時代だって決して良好な関係を築いていたとは言えず、卒業間近の頃にはむしろ険悪なほどだったのに。

「わ、わかった! せっかくディナーの予約してたのに、彼女にフラレちゃったとか!」

「この予約は、お前のためだ。久々の同級生との再会を祝おうと思ったんだけど?」

「はあっ!」

目の前にいる木田は、あきらかに葉月に対してアクションを起こしている。そこにどんな意味があるのか、こっちはパニック寸前だ。

「小山内……俺のこと、嫌い?」

「はっ!」

突然の言葉に、声が裏返る。

「な、何言ってるの? どんな意味よ!」

「そのままの意味だよ。俺のこと嫌いかって」

「き、き、嫌いかって……」

バカ正直に、問われた意味を考えてしまう。

「嫌いか、す、好きとか……そういう対象じゃないって言うかっ」

「じゃあそういう対象で見てる?」

「え……」

目を大きく見開いた葉月のすぐ傍そばに、木田の顔が迫った。

「わ、ちょ、待った、ちょっと」

「待たない」

壁にべったりと張り付いた葉月の唇に、アルコール臭い木田の唇が重なる。

「やだっ、んーっ!!」

拒絶の言葉は、彼の唇の奥へと吸い込まれていった。

突然のことに思考がついていかない。目の前には木田の顔。開かれたままの彼の目に宿る熱情が怖くて、思わず葉月は目を瞑ってしまった。それをこの行為に対する肯定とでも受け取ったのか、木田の手が葉月の首の後ろに回り、ぐっと顔を固定してきた。

息ができない。

わずかでもいいから隙間が欲しくて唇をずらし口を開くと、まるで待ち構えていたかのように木田の舌が差し込まれる。ぬるりとした感触に、背中が粟立った。

「んっ、や」

非難の声も、深く差し込まれた舌によって遮られた。熱く濡れた舌が葉月の舌に絡みつく。どうしたらいいかわからず、葉月はただ身を硬くしていた。

ぴちやりと、水音がした。口を閉じようとしてもできず、竦んで縮こまった葉月の舌には執拗に木田の舌が絡みつく。頭に回っていた手が優しく後頭部を撫で、ボブの髪をすくいながらすると葉月の耳の縁を撫でた。

「ふっ、あ」

吐息と共に身体がびくんと揺れてしまう。すると、何故か木田の舌の動きは一層激し

くなった。

ドクドクと全身が脈打ち、次第に頭がぼーっとしてくる。アルコールを飲んだせいもあるのか、置かれている状況をうまく把握できない。

触れ合う唇が、熱くて蕩けてしまいそうだ。気持ちいい。今何してるんだっけ。

うっすら目を開いてみると、同じく目を細めて葉月を見つめる瞳があった。真剣な眼差しに目を逸らせないと、ほんの少し唇が離れた。そして、唇をゆっくりと舐められる。

それは、なんだか慣れた仕事で。

(私、何やってんの!?)

気付くと、葉月は渾身の力を込めて木田の身体を押し返していた。

「いっ、いい加減にしろ!!」

ふいをつかれたのか、意外にも木田の身体はあっさりと離れた。彼は一気に無表情になり、葉月の顔を見つめ返す。

「な、な、何があったか知らないけど、目え覚ませ!」

葉月はゼーゼーと肩で息をしながら木田を睨みつけた。

「あの時と、お、同じじゃん!! アンタ、いい年して何やってんの!?!」

「はは、忘れてなかったか」

「忘れるわけ、ないだろうがあ!!」
 ちようど手元にあつた枕を勢いよく投げつけ、ベッドから飛び下りた。途端に足がずきりと痛んだが、気力でなんとか耐える。

「バカっ!!」
 床に落ちていたバッグを拾い上げ、よろめきながらも急いで部屋の外に出た。そのままの勢いでエレベーターに駆け込む。木田が追いかけてくる気配はなかったが、「閉」のボタンをガシガシと連打した。

「痛……」
 ズキズキと足首が痛む。ようやく下り始めたエレベーターの壁に寄りかかりながら、透明のガラス越しに夜景を見下ろす。

どうして木田はあんなことをしたのか。——考えても答えは一つしか出ない。
 (アイツ、また……私のことからかかってるんだ)

中学の時と今は違う。それなのに、何故また葉月を選ぶのか。それほど自分は木田にバカにされているのだろうか。

しかも、いくら酒を飲んでたからといって、あんなキスを——
 無意識に指で唇に触れ、そこにさっきまで彼の唇が重なったことを思い、ほんっと顔が赤くなつた。

熱い唇に、濡れた舌。当たり前のように葉月の口腔こうくうに入ってきて、中を妖しくかき乱した。思い出しただけで、身体が熱くなってくる。あの時葉月の身体を占めていたのは、間違いなく快感だった。

「あああああっ!! もう、やだ……っ」

誰もいないのをいいことに、エレベーターの壁をこんこんと拳こぶしで叩く。

——何やつてるんだ。二度もこんなことを、あの男と。
 悔しくて滲じんだ涙が流れそうになるのを、葉月は奥歯を噛みしめて堪こたえていた。

2 淡い想いと深い傷

「え、木田もM高志望だったんだ」

「なんだ、小山内もか」

「へえ、珍しいね」

葉月と木田は小学生からの付き合いだった。小学生の頃は同じクラスだった時期もあり、グループで一緒に遊んだことも何度かある。とはいえ、中学に入ってからからはクラスが違ったため、まともな会話をしたのは中三のこの時が久々だった。

二人の通う中学から遠く離れた新設校のオープンスクール。当然知り合いなどいるはずないと思っていたため、知った顔を見かけた嬉しさにごく自然に声をかけていた。彼の方でもそれは同じだったのか、一瞬驚いたような顔をしたものの普通に会話をしてくれた。

「ねえ、なんで木田はM高志望なの？」

「……言っているのかわかんねえけど、従兄いとこがここで働いてるんだ。校風とか、俺に合ってるんじゃないかって薦められて」

「えっ、もしかして先生？ だったら受験とかめっちゃ有利そう……」

「バカ、違うって」

くしゃりと顔を崩すように笑う。それを見て、とくと胸が鳴った。どうしたんだ私。そう思いながら、きゅっと胸元を押さえる。

「残念だけど、ただの事務員。きつと何の権限もないだろうな。オイ、次、体育館だつてよ」

他に知り合いのいない心細さから、二人はなんとなく行動を共にする。

「お前は？」

「私？ レベル的にもちょうどいいし、ちょっと入りたい部活があつて」

「ちょうどいいって……それはギリギリの俺に対する嫌味か」

他愛もない話は意外にもはずみ、それが嬉しくてつい声が大きくなる。

「やっぱ新しい高校だから制服もおしゃれで可愛いし……って、もちろんそれだけじゃないけど」

中学校の制服は、色気も何もないジャンパースカートだった。他校のように腰で折って短くすることもできないし、裾すそを上げたとしても限界がある。

それに、おしゃれしたくてもできないだけでなく、最近かなり膨ふくらんできた胸が強調されるデザインも、イヤで仕方がなかった。

「可愛い制服……か」

木田がちらりと横目で葉月の身体を見た。

「……何よ。どーせ太ってるから似合わないって言いたいんでしょっ」

「なっ、何も言っていないだろ」

葉月は小さい頃からぼつちやりとした体形だ。周りの大人は「気にすることは無い」と言ってくれたが、思春期に突入したこの頃は周囲の友達の詳細が羨ましくて仕方がなかった。

コンプレックスはどんどん膨らんでいく。それを誤魔化すには、むしろ太っていることをネタにするのが一番楽だった。

「私みたいなデブでも、ここの可愛い制服を着れば少しくらいはマシになるかもしれないじゃん！」

笑いながらわざと明るく言うと、木田は笑うどころか眉をひそめ葉月をまっすぐに見つめた。

「……ていうか、俺は、お前は別に太ってねえと思うけど」

驚いて息を吸い込んだ。ふ、太ってない？ 同級生の男子に、からかわれることはあっても面と向かってフォロワーされた経験はなかった。「今なんて言った？」と問い詰めた。気持ち悪く、寸前で堪える。

「まあ、確かに女子の制服は可愛いよな」

「で、でしょ？」

顔を仄かに赤く染めながら、葉月は無理に作り笑いを浮かべた。

（確か……木田ってバレー部だったっけ）

そういうえは一部の女子がこっそりと勝手に作成した「付き合いたい男子ランキング」に、木田の名前があったことを思い出した。彼とは中学に入ってから同じクラスになったことがなかったので、その人気もあまり知らなかった。

（背も高いし顔も悪くないし、私にまで気を遣ってくれる男子なら……そりゃ人気もあるよね）

自分よりはるか上にある横顔を、そっと窺う。

骨ばった顎のラインが、同じクラスの男子たちよりもずっと大人っぽく見える。

ぼーっと目を奪われていたら、視線に気付いた木田がふいに葉月を見下ろした。目が合えばさらに胸が高鳴る。

「ん？ 何？」

「え、べつ別に!! そうだ、この後まっすぐ帰るなら、どうせ方向同じだし一緒に帰らない？」

「……いいけど」

思いがけず約束ができたことが嬉しくて、下を向いて込み上げる笑みを嘸み殺す。「それならさあ、駅前でハンバーガー食っていい？ 腹減って死にそう……」

「えー？ お昼食べたばっかりなのに」
男子とこんなに気楽に話すのは久々だ。小学校が一緒だったとはいえ、ここまで話が自然にできるのも珍しい。嬉しくて、葉月の笑い声は少しだけ大きくなっていった。

それを、チラチラ見ている人たちがいるのも知らずに。

長身で高校生と間違えられるくらい大人っぽい木田は、自然と注目を浴びていた。多感なこの時期に、ただ、一緒に行動をしている。だけで自分まで注目されるということに、葉月はまるで気付いていなかった。

何事もなく終わったオープンスクールから一週間後、二人が付き合っているという噂がいつの間にか学校中に流れていた。

「お前ら、付き合ってるんだってー？」

オープンスクール以来、顔を合わせれば話しかけるようになり、その日も廊下でつい話し込んでいた。

なんだか微妙に注目されてる気がしてあたりを窺うと、ニヤニヤしながらこちらを見ている男子の集団があった。あまりガラがよくない、でも注目度や影響力は高い集団だ。

「何言ってるの!? 志望校かぶっただけで付き合ってるとか、訳わかんない！」

黙り込んだ木田をよそに、ついムキになって反論する。今ならそれが逆効果だとわかるが、その頃はわからなかった。

「志望校かぶったっていうかー、一緒にしたんだろ？ わざわざあーんな遠い学校選んでさあ。そんなに二人だけの世界を作りたいんだあ？」

ニヤニヤ笑いながらからかわれ、かっと顔が赤くなった。

「凶星かよ！」

そんな葉月を指差し、げらげらと笑い声があがる。

(どうしよう、何か言わなきゃ、何て言えば……)

真っ赤になりながらパニックを起こす葉月の横で、木田が深いため息を吐いた。

「あほくさ。お前、何反応してるんだよ」

ガラの悪い集団にからかわれたことよりも、冷たく言い放たれたその一言にぐさりと傷ついた。

「……ごめん」

くるりと踵を返して駆け出すと、背後から連中の笑い声が聞こえてきた。木田はあの場で、いつたいどんな顔をしているのだろう。後ろを振り向けないまま、自分のクラスに駆け込む。

(わかってるけどさ……あんな言い方することないのに！)

たったそれだけのことなのに、その後の授業はひどく落ち込んだ気持ちで過ごした。放課後、家の近くの公園を横切って帰っていると、出口近くのベンチに木田が座っているのが見えた。鞆を横に置いたまま、一心不乱いっしんふらんに本を読んでいる。しばしその姿を見つめた後に、ハッとした。

(なんでこんなところにいるの!?)

気配に気付いたのか、木田が顔を上げ葉月の方に視線を向ける。それに微笑み返しそうになって、慌てて唇を引き結んだ。彼に会えて嬉しい気持ちを、咄嗟とっさに隠した。

「おう」

ぶつきらぼうにかけられたその言葉で、彼はいつも通りだと悟る。葉月はキョロキョロと周りを見回し誰もいないことを確認してから、そっと隣に腰を下ろした。

「何読んでるの?」

「……別に。言っちゃって、わかんないだろ」

「いいじゃん、教えてくれたって……」

口をとがらした葉月の膝の上に、彼は鞆から取り出したパンフレットをバサリと置いた。

「何、これ?」

「行きたいって言ってた塾の資料。俺、そこに行くことになったからお前にもやる」

(同じ塾なんて行ったら……ますます何言われるかわかんないじゃん)

パンフレットをバラバラとめくりながら、ちらりと隣を窺うかがう。木田は何を考えているのだろう。葉月の視線を知ってか知らずか、彼の目は変わらず本に向いている。

まだ隣にいいのか、それとも礼を言っただけなのか。

悩みながらじつとベンチに座っていると、スッと木田が立ち上がった。そしてそのままに何も言わずスタスタと公園を出ていく。

「あ……」

待って、とは言えなかった。言っただけで、引き留めてどうなる。

(もう少し何か話したかったのに。何も言わずに急に行っちゃうなんて……)

葉月が膝の上に視線を落とした時に、ワイワイと騒がしい声が聞こえてきた。何事かと視線をそちらに向けると、休み時間に葉月と木田のことをからかってきた連中が連れだって歩いてくるのが見えた。

驚いて身を硬くしていると、一人が葉月に気付き、周りを促うながし近寄ってくる。

「あれ、小山内じゃん。彼氏はどうした?」

一人の言葉に、品のない高笑いが上がった。むすっとした顔でパンフレットに目を落とし無視していると、からかうことを諦めたのか、退屈そうに連中は去っていった。

「そっか……」

独り言がもれる。奴らが来るのが見えたから、木田は急いで葉月から離れたのだろう。嫌われたわけじゃなかったとほっとする気持ちと、意識しすぎている自分を齒がゆく思う気持ちがせめぎ合う。

一緒にいてからかわれるのは嫌だ。でも、これはなんだか寂しい。自分の中のその感情が何なのか、突き詰めるのは怖かった。

気にすることじゃないのはわかっている。でもからかわれるようになって以来、まともに木田とは話ができなくなってしまった。

放課後に校外で顔を合わせる機会だったのに、どこかで誰かが見てると思うと話せない。そんな、自意識過剰な年頃だった。悩んだ末、結局塾は木田がパンフレットをくれた塾ではなく、クラスの友達が多く通っていたところに決めた。

話さない分、会えない分、もやもやした気持ちは募る。話したい。でも、周りが気になって素直に話せない。

そんな葉月の態度をどう取ったのか、木田も葉月には滅多に話しかけてこなくなった。あきらかに目が合ったのに露骨に逸らされることもあった。

それを寂しく思うなんて身勝手にもほどがあっただけれど、どうしようもなかった。

（このままあの高校に行ったら、どうなるんだろう……）

同級生でおそらく他に志望者はいない。それでもかまわないと思っただけだが、唯一の志望者と気まづいままというのはいたたまれない。絶対に行きたいと思っただけが、どんどん色あせて見えてきた。

（志望校、変えようかな）

元々家から遠いこともあって、両親はいい顔をしていなかった。特に母親は、レベルは少し高くなるが家から通うのも楽な女子高に進むのを願っている。その女子高には、三者面談で担任から「もう少しがんばれば、小山内なら大丈夫」と太鼓判を押され、母親は随分その気になっていた。

志望校にこだわっていた理由は「入りたい部活があるから」と「制服が可愛いからだ」だったが、それすら段々とどうでもよくなってきた。

「どうしよう……」

放課後、図書室で勉強をした帰りに一人廊下を歩く。

誰かに相談しようにも、両親や教師は少しでもランクの高い女子高を薦めてくるのが目に見えているし、友達に相談するには理由を話す勇気がない。

志望校を決める最後の学力テストが好成绩だったこともあり、母の望む女子高も狙えるレベルになっていた。

あとは自分の気持ち次第だ。
憂鬱な気持ちで歩いていると、通りかかった教室から声が聞こえてきた。
「ばーか！ そんなんじゃないやねえよ！」
(木田の声だ！)

心臓がどきりと鳴り、足が止まった。噂うわさをされるようになってから彼のクラスの前はなるべく通らないようにしていたのに、無意識のうちに近くまで来ていたらしい。わずかに開いた扉のすぐ手前で、引き返そうかと迷う。

「なんだよ、照れるなよ」

「お似合いじゃん！」

他の男子のはやしたてるような声が聞こえる。間違はなくからかわれているのは木田で、話の内容は恋愛がらみだとすぐにわかった。いつの間にか、そういうのに敏感になつていた。

(もしかして、また私とのこと?)

だとしたら、一刻も早くここから立ち去らなきゃ――

頭ではわかっているのに、何故だか身体が動かない。

自分とのことかもしれないけれど、そうじゃないかもしれない。木田の恋愛話なら、聞きたいという欲望が勝った。

立ち読みサンプル はここまで

「一組の小山内……? どんなやつだったっけ?」

やっぱり出てきた自分の名前に、ぎくつと身体が固まる。

「あれ、お前知らないの?」

「ほらアイツ、手芸部だから、髪の毛をいっつもてっぺんでおだんごにして……」

「あつ、わかった! あのおっぱいでけーヤツか」

え、と胸に抱いた参考書を握りしめる手に力が入った。

そんな目で男子に見られているなんて、想像もしていなかった。

「中三であの胸のデカさはねーよな」

「おお。制服着てもわかるくらい、ポンって感じで。めちゃくちゃ柔らかかそう」

「もしかして木田、もう触ったのか? うらやましいヤツ」

「だっ、だから、小山内とはなんでもないって言ってるだろ!」

周りにはやしたてられ、怒ったような木田の声が響く。

「照れるなつて! 一緒に歩いているの見たつて言うヤツもいるんだぞ」

「揉み放題だな。俺にも触らせろよ」

廊下で会話を聞きながら、背筋がぞわぞわと寒くなってきた。

(気持ち悪い……)

顔も名前も知らない男子に、そんな風に思われているのが不快でたまらなかった。こ